

弘前学院大学ティーチング・ポートフォリオ

文学部・英語・英米文学科
川浪 亜弥子

作成日 2024年1月15日

1. 教育の責務

私は、16世紀から17世紀初頭にかけて活躍したイギリスの劇作家シェイクスピアが生きた時代の、イギリスを中心とするヨーロッパの歴史や文化、及びその時代の文学作品を研究対象としている。シェイクスピアが生きた時代は、近代、現代が抱えるさまざまな問題の萌芽がみられた時代でもある。従って、教育の現場では、シェイクスピアの時代から近代、現代に至るまでのイギリスを中心とする西洋社会を広く俯瞰する立場に立って、歴史的、哲学的、文化的、文学的側面からアプローチし、多様なものの見方を培うことを責務としている。

2023年度担当授業

科目名	学年	授業種別	開講学期	概要
Basic English Reading I	1年	講義	前期	英語の基礎学力の確認
言語・文学・文化の基礎	1年	講義	前期	基礎的知識の習得
欧米文学・文化概論 B	1年	講義	後期	欧米文学・文化の基礎知識の習得
キリスト教文化	1～4年	講義	後期	イギリスにおける宗教改革
イギリス文学史 A・B	1～4年	講義	前期 後期	イギリス文学の通史
イギリス原文講読	2年	講義	前期	読解力養成のための文献講読
Shakespeare in Performance	2～4年	演習	後期	演技を通じての表現力の育成
Cultural Studies B	2～4年	講義	後期	時代変化を背景とした芸術解釈
欧米文学・文化演習I E・F	3年	演習	前後	欧米文化関係トピックの探究
欧米文学・文化演習II E・F	4年	演習	前後	欧米文化関係トピックの探究
Presentation Skills	4年	演習	前期	英語によるプレゼン方法の習得
卒業論文	4年	卒業論文	通年	卒業論文指導

2. 教育の理念

私が教育の理念として念頭に置いていることは、学生たちが想像力を身につけ、自由に考えることができるように導いていきたいということである。基礎となる知識を教えることは当然のこととしてまず行わなければならないことだが、その知識を身につけた後には自由な発想ができるように、型にとらわれない精神を育てていきたい。従って、学生に期待することは、単なる知識の表面的な覚え込みではなく、臆することなく自由にものを考え、表現してもらいたいと考えている。

大学生活がスタートする一年生に向けては、欧米文学・文化概論やイギリス文学史などの基礎的な知識を習得する科目を担当しているが、3年、4年次へと学年が進み演習科目に至った時には、一年次に聞き及んだ基礎的事柄をベースにしながら、自らの自由な発想を展開すべく、自らの関心事を見つけ、分析し探究して行ってもらいたいと考えている。

3. 教育の方法

一年次の概論などの科目において、知識をきちんと習得できるように、細かい項目ごとに小課題を課し、自分で調べまとめることを促している。また、グループを作り、グループで相談して共同作業で調査をしてもらい、発表してもらっている。

英語を習得し、自信を持って流暢に話すことができるようになるためには、単に単語や文法を習得するだけではなく、表現力の伴った英語の運用というのが必要だと考えている。Shakespeare in Performance や Presentation Skills のような授業においては、表現力を大いに培えるように、実際に演劇の場面を演じ、自分の選んだトピックについてパワーポイントを用いてプレゼンテーションを行ってもらっている。

近年の学生は、読解力に著しく欠けている。日本語にしろ、英語にしろ、活字に触れることが少ないからであろう。読解力は非常に大切なものであるが、いきなり英語散文の一部を読ませても拒絶反応を示す学生が多い。その対策として、映画を鑑賞することから始め、イメージを持たせてから、そのベースとなっている作品の一部を読解してみるというプロセスを取り入れている。

三年、四年次の演習、また卒業論文では、発表を行ってもらい、その時のフィードバックを鑑みながら、レポート作成をさせている。更にそのレポートにもコメントや添削を施し、推敲作業をさせている。思考する力、書く力を養うためである。

4. 教育の成果

グループで担当を決めて発表してもらおう形をとって以来、自分たちで判断してまとめてみるといったアクティブな姿勢がみられるようになった。これは教員から一方的に知識を伝える講義型の授業では得られない成果である。

劇作品の演技、またパワーポイントを作成してプレゼンテーションを行なってもらうという能動的なアクティビティが求められる授業においては、当初は学生が恥ずかしがるなどして上手く実行できなかったが、最近では手応えを感じ始めている。講義型の事業と異なるこのようなスタイルの授業では、教師・学生ともに自分なりに行うことについてのイメージを持つことが必要であり、それは新鮮であるし、やりがいを持ってもらっている。

授業アンケートの評価からも推察できるように、映画などのメディアを用いた授業では、学生の関心をより効果的に引き出せるという感覚が得られている。

演習の授業において、自分のトピックを選び、それを更なる調査によって深め、作文によって自分の考えを展開するという作業では、3年次、4年次と進むにつれて徐々に形をなして行く様子を見て取れる。フィードバックを通して遂行作業を繰り返している成果だと考える。

5. 教育の改善

以上の取り組みを通して、学生が自分の意見や感想を自由に力強く展開できるように指導しているわけだが、ある程度の成果は確実にみられるものの、まだまだ改善の余地がある。高校までの教育の影響のせいなのだろうが、入学してくる学生は、一問一答型の思考に慣れきっている学生が多い。従って、自由にものを見たり、発言したりできる学生はまだまだ少ない。私が行なっている取り組みには時間がかかるだろうと思われるが、シラバスに記載された授業プランの説明を丁寧に行うことを通して、粘り強く取り組んでいきたい。

6. 教育の目標

私が教育の理念として念頭においていることは、学生たちが想像力を身につけ、自由に考えることができるように導いていきたいということである。基礎となる知識を教えることは当然のこととしてまず行わなければならないことだが、その知識を身につけた後には自由な発想ができるように、型にとらわれない精神を育てていきたい。従って、学生に期待することは、単なる知識の表面的な覚え込みではなく、臆することなく自由にものを考え、表現してもらいたいと考えている。この理念を実現すべく、多面的なアプローチにより、学生を励まし、共に取り組んでいきたいと考える。

【資料】

1. シラバス
2. DVD等の映像教材
3. 学生アンケート
4. 学生のレポート課題
5. 学生による演技の記録
6. 卒業論文